
バカとテストと召喚獣と教室とYシャツと俺

ペルシュロン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣と教室とYシャツと俺

【NNコード】

N2353W

【作者名】

ペルシュロン

【あらすじ】

当作品は「バカとテストと召喚獣」の一次創作作品です。

今日から新学年、振り分け試験の日に学校をサボった剣 清正はF
クラスに配属されることになった。

学力はそこそこあるけど勉強は嫌いなサボリ魔。

そんな駄目人間が文月学園でどのような道を歩んでいくのか
それは作者も知らない。

1話（前書き）

当小説は「チラシの裏にでも書いてろ」レベルな作品になる予定です。

「見苦しいのヤダー！」という方は「戻る」をクリックしてくださいな

数あるバカテス二次創作小説を読ませていただく内に自分でも書いてみたくなつたので投稿します。

あと、タイトルに意味はありません。

他と被らない上手いタイトルが思いつかなかつただけです。orz

1話

今日から文月学園は新学年、俺は進級して2年生になった。

満開の桜をぼんやりと眺めながら、文月学園へと続く坂道を上り切ると去年1年間通った校舎が見える。

新しい教室、新しいクラスメイト、新しい生活への微かな期待を胸に校門を通過うとする、校門前に居た体格の良い教員がこちらに向かって歩いてきた。

生活指導の鉄人・・・もとい、西村宗一教員だ。俺は軽く会釈して挨拶した。

「おはよひびきやー」「遅刻だ、剣^{つるぎ}ます、申し訳ありません西村教員」

新学年最初の発言は、挨拶に加えて謝罪の言葉だった。

「全く・・・お前の遅刻癖はどうにかならんのか?去年も点数は取れるのに進級、ギリギリになる程の出席日数だつただろ?」

「西村教員、それは違います。俺は一度も遅刻なんてした覚えはありませんよ」

「何を言つとるか貴様は、アレが遅刻でなくて何だと言つのだ」

「俺はHRと1時間目をサボつただけです、朝急ぐの面倒なので」

「なあ悪いわ!」

がつんと脳天に拳骨を落とされた。痛みと衝撃でクラクラする。

「はあ・・・まあいい。さて、これがお前の分だ、受け取れ

西村教員は足元の箱から、『剣 清正』と書かれた封筒を取り出して差し出してきた。

「ありがとうございます」

「その中にお前の所属するクラスの書かれた紙が入っているからな、ちゃんと中身を確認しておけよ」

「いえ、確認する必要はありませんよ」

「何?」

「だって

「振り分け試験の日、学校サボりましたからね

脳天に本日2発目の拳骨が落とされた。

バカとテストと召喚獣と教室とソシャツと俺

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』
- 『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喻え』

姫路瑞希の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

剣清正の答え

- 『（1）弘法も筆の誤り』
- 『（2）泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り田に祟り田』などがありますね。

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

教師のコメント

シユールな光景ですね。

吉井明久の答え

『（2）泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

試験当日にサボタージュした俺の振り分け試験の点数は〇点扱い、配属クラスは当然Fクラスである。
教室へ向かう途中でAクラスの教室をチラリと覗いてみたが、やはり他クラスとは設備の格が違うな・・・
システムデスクやリクライニングシートはともかく、飲料食料完備の冷蔵庫は羨ましい限りだ。

少しだけ勉強頑張つていればよかつたかもしれないという考えが頭をよぎったが、よぎつただけですぐに消えた。

そんな事より早く教室に行かないと、流石に始業初日でこれ以上遅くなると到着と同時に終礼なんて事もあり得なくは無い。

早足になつてFクラスへと急ぎ、ドアを開けよつとした所で

『ダアアーリイーーン！』

教室内から野太い声の大合唱が聞こえてきた、ドアを開ける前から嫌な予感しかしない。

とはいって、ここが2・Fの教室である事は間違いないので開けるしかない・・・俺は心を落ち着けてからドアの取っ手に手を掛け、教室に入った。

まず感じたのは違和感、教壇に立つている教員を除いて全員頭の位置が低い。

そして、その違和感の正体はすぐに解った。この教室には椅子が無い。生徒の席にあるのはちやぶ台と座布団だけだ。

(これは・・・想像以上だな、せめて椅子と机くらいはあるものかと思つてたけど、まさか座布団とは・・・)

Fクラスの設備の想像以上の粗末さに少々呆れていると、担任と思われる教員が声を掛けてきた。

「遅刻ですよ。とりあえず、空いている席に座つてください。」

「わかりました」

俺は空いている席に適当に腰掛けた。何故か右半分だけ綿が入っていない座布団とは新感覚だな。

どうやら今は自己紹介の最中らしい。つまり先ほどの『ダアアー

「リィーンー！」は誰かの自己紹介に対しての対応なのだろう。誰だ、あんな返し方されるような自己紹介したの。

次々と自己紹介が行われ、すぐに俺の番が回ってきた。

「俺は剣 清正^{つるぎ きよまさ}、得意教科は理数系と現代文、苦手教科は歴史系と古文。

趣味は・・・ゲームとか漫画とか・・・あと料理だな、これから1年間、宜しく頼む」

我ながら無難な自己紹介を進めていると、突然教室のドアが開き、桃色の髪をした女が息を切らせながら入ってきた。

あまり交流の無い他人の事を覚えない俺でも見覚えがある顔だ、確かに・・・苗字は姫路だつたな。

成績優秀だと聞いていたが、何故ここに来たのだろう・・・入る教室を間違えた？否、教室は階段を挟んで逆方向だし、何より外から見ても明らかに外観や清潔さが違う。

まさか、姫路も試験の日にサボりでもしたのか？

「あの、遅れて、すいま、せん・・・・・・」

唐突に現れた予想外の人物に、クラスメイト達が困惑しているようだ。

そんな中、平然としている教員（黒板を見るに福原慎といつ名前のようだ）が姫路に話しかけた。

「丁度よかつたです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

「は、はい！あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします・・・

・・・・・」

ふむ、実に簡潔な自己紹介だつたな。声も小さかつたし、緊張して
いるのだろう。

「はいっ！質問です！」

声の発生源を目で追うと、男子生徒が手を上げて姫路に質問を投げかけていた。

「あ、は、はいつ。なんですか？」

「何でここに居るんですか?」

これは俺も気になつてゐる。成績に問題は無いはずだろうから、何か特殊な理由があるのだとは思うが・・・

さつきはサボタージュの可能性も考えたが、恐らく「そういふ」とする性格ではないだろう。その度胸も無さそうだ

「そ、その・・・・・振り分け試験の最中に高熱を出してしまいました・・・・・」

成る程な、試験中の途中退席は全テスト0点扱いになると聞いたが、それが原因か。とはいへ、規則は規則だしな、仕方ないだろう。本人としては不本意だろうが、来年まではこのFクラスで頑張つてもらうしかないだろうな。

「そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、科学だろ？ アレは難しかつたな」

「俺は弟が事故に遭つたと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

「いづらにも同情は要らないな。といづかFクラスのメンバーはここまでバカなのか・・・いや、全く成績を気にしてないとしたら逆に大物かもしれないな。」

「で、では、一年間よろしくお願ひしますっ！」

姫路はそつと、そそくわと空いている席に着いた。
クラスメイト達のざわめきは未だ止まず、福原教員は穏やかな表情を変えず、パンパン、と教卓を叩いて

「はいはい。その人達、静かにしてくださいね」

と注意の声を掛けた。

「あ、すいませ　　」

と後ろの方の席に居る男子生徒が返答しようとする

バキイツ　バラバラバラ・・・・・

教卓が崩れて粗大ごみへと変貌した。いや、これだけバラバラだともはや燃えるごみで出せるかもしない。

生徒用だけでなく、教員用の設備までボロボロとは流石文月学園、

徹底しているな。

福原教員は「替えを用意してきます」と気まずそうに言い残し、教室を出て行った。

すると、先ほど教員に謝りかけていた男子生徒が、姫路を挟んで横隣に居る髪を逆立てた男子生徒に声を掛け始めた。

「…………雄一、ちょっとといい?」

「ん?なんだ明久」

「(イ)じや話しひくから、廊下で」

「別に構わんが」

明久と呼ばれた奴と逆毛の奴は立ち上がって廊下に出て行った。何を話しているのかは知らんが、まあ気にする事でも無し、放つておこう。

しばらくすると一人とも教室に戻つて来て、直後に福原教員も新しい(それでもボロい)教卓を抱えて戻ってきて

「さて、それでは自己紹介の続きをお願ひします」

手に着いた埃をパンパンと払いながら自己紹介の続きを促した。ほぼ全員の自己紹介が終わり、最後に先ほど廊下に出ていた逆毛の男子生徒の自己紹介の番になつた。

「坂本君、君が自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

先ほど坂本と呼ばれた逆毛の生徒が立ち上がりて悠然と教壇まで歩いていく様は、何やらオーラというか貫禄のようなものを感じさせた。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

そう福原教員に問われ、頷く坂本。

あいつがクラス代表だったのか。まあ代表といつてもFクラス内の成績最優秀者だから、それは別に自慢できる事ではない。そして坂本は自信満々といった表情で壇上に上がると、教室の生徒全体に聞こえるように話し始めた。

「Fクラス代表の坂本雄一だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ・・・・・・それで、皆に一つ聞きたい」

坂本はクラス全員の視線を集めるように少し間を置いてこう言った

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が　　不満は無いか？」

『　　『　　『　　大ありじやあつ！』』』』』

Fクラスほぼ全員が示し合わせたように大きく不満の叫びを上げた。よく打ち合わせも無しに一字一句違わずにピッタリ合わせられるな、実はチームワークは凄まじいのかも知れない。

「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そりだそりだ！』

『いくら学費が安いからって、この設備はあまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！』

堰を切つたように方々から不満の声が上がる

それを抑えて坂本が話を続ける。こいつ、話するの上手いな・・・上手く人の注意の引いてから話すからつい聞いてしまう。

坂本は自信たっぷりの笑みを浮かべて

「これは代表としての提案だが
試験召喚戦争』を仕掛けようと思つ

戦争の引き金を引いた。

1話（後書き）

長々書くとダラダラなので、次回からは1話あたり短めで投稿します。

(へえ、いきなり試召戦争を仕掛けるか……しかも目標がAクラスとは大きく出たな)

坂本代表による突然のAクラス打倒宣言に対し、他の生徒の半は無理だ、勝てっこない、姫路さんさえ入れば何も要らない、などと異を唱えている。(誰だ最後の……)

確かに、最上位であるAクラスと最下位のFクラスでは点数に天と地ほどの差がある。

試験召喚獣の強さは試験の点数が直接反映される為、やり方次第ではAクラスの人間一人によつてFクラスが総崩れになる事も有り得る。

それ程の戦力差では、生半可な事では勝つ事などできないだろ?。

「そんなことはない、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

しかし、坂本はその戦力差を承知の上で勝つと言い切つてみせた。

ふーむ……何か考えがあるようだけど、实际上手く行くのかね?
事は教室の設備に関わる事だ。ちょっと訊いてみるか。

「Aクラスに試召戦争を挑むのは分かつた。でも、勝算はあるのか?
?無策に挑んで負けて、これ以上に設備が悪くなるのは御免だぞ」「
勝算はある。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要
素が揃つていいからな。それを今から説明してやる」

俺の質問に対して坂本はそう返すと、明らかにおかしな態勢で畠に顔を押し付けている男子生徒に声をかけた。

「おいムツツリーー、姫路のスカートを覗いてないで前に来い」

「…………（ブンブン）」

「は、はわっ！？」

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

姫路が慌ててスカートの裾を押さえると、土屋は畠から顔を上げた。その顔には畠の跡がクッキリと残っている。

それにしても、あいつがムツツリーーか……

噂を聞いたこと位はあったが、同じクラスだったのか。保健体育だけなら教師にも迫る点数らしい。なるほど、ムツツリ呼ばわりも納得だな。

顔についた畠の跡を必死で隠しているが、誰が見てもバレバレだ。

坂本は話を続ける

「姫路のことは説明する必要も無いだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えつ？ わ、私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

確かに、姫路の成績は学年でもトップクラスだからな。
低得点者ばかりのこのクラスでは最強の切り札になるだろう。
姫路の話題に他の男子生徒も色めき立つ。

『そうだ、俺達には姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ、彼女さえいれば何也要らないな』

さつきから姫路にラブコールを送っている奴が誰なのか非常に気に

なる。見ろ、本人に聞こえて顔真っ赤にしてるじゃないか。

「木下秀吉だつている」

木下……ああ、確かに演劇部のホープとか言われてたつて。中性的どころか美少女的な顔立ちのせいで、男にまで迫られているらしい。

「それに剣清正、お前にも一働きしてもらひつぞ」

「何?」

「振り分け試験直前のテスト、Bクラス並だったそうじゃないか。」

「……よく知ってるな」

坂本が俺の事まで知つていたのは意外だった。

まさかコイツ、クラス全員の情報でも持つてるのか?

「そりゃあ知つてるさ、『昼行灯』さんよ?」

「……あまり昼行灯(そのあだ名)で呼ばないでくれるか、その呼ばれ方は好きじゃないんだ。」

『Bクラスレベルも居るのか!』

『あんな普通な感じなのに、人は見た目に因らないな』

『でも昼行灯って呼ばれてる奴なんて聞いたこと無いぞ?』

『昼行灯』という呼び方は、1年の頃に俺に付けられたあだ名だ。その理由は、昼に燈された行灯のように目立たないかららしい。そう呼ばれている事が知られてないのも当然で、『目立たないからこそ、一部で昼行灯なんて呼ばれているのだ

自覚はしてるし、自分で日頃からあまり目立たないようにしてたんだけど、他人に言われると妙に腹が立つんだよな……。

「そりや悪かつたな」

坂本は肩をすくめて軽い様子で謝罪してきた。「…あらとしても無駄に重く捉えられるよりずっと良かつたのでそのまま流す事にした。

「さておき、当然俺も全力を尽くす」

坂本に関しては成績は知らないが、俺の成績やあだ名まで知つていて情報収集能力、クラス全員を引き込んで話を聞かせて先導（もしくは扇動）するリーダーシップあるいはカリスマ性。周りの声を聞いてみれば、かつては神童と呼ばれていたとか。……それが何故Fクラスに居るのかという疑問はあるが、代表としての坂本には、とりあえず文句はないだらう。

周りのテンションも上がってきた。これなら行けるんじゃないか、と。

そこに坂本が最後の一人の名を挙げると

「それに、吉井明久だつている」

ざわついていた周囲がシン と静まった

明久……つてさつき坂本と一緒に廊下に出ていたアイツだよな？ 名前が出るだけで周りが静まるつて、……コイツ実はすごい奴なのか？

「ちょっと雄一ー・どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさー全くそんな必要はないよねー」

『誰だよ、吉井明久つて
『聞いたこと無いぞ』

「どうやら、周囲が静まった理由は単純に知名度の低さからだつたらしい。

「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄一たちは違つて普通の人間なんだから、普通の扱いをつて、なんで僕を睨むの？士気が下がつたのは僕のせいじゃないでしょ？」

「そうか、知らないようなら教えてやる。」

文句を言いつ吉井を眼中に無くようにスルーしつつ、坂本が言葉を続ける。

「こいつの肩書きは、>観察処分者<だ」

観察処分者……つて、俺の記憶が正しければ

『……それつて、バカの代名詞じゃなかつたっけ？』

クラスメイトの誰かがそう言つと

「ち、違つよつーちよつとお茶田なー6歳につけられる愛称で

」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄一！」

観察処分者とは、特別に素行に問題があつたり、勉学において著しく問題がある生徒に課せられる称号である。

観察処分者に任命された生徒の試験召喚獣には『物質に接触、干渉できる』という性質が与えられ、その性質を利用して教師の雑用（主に、荷物運びや倉庫の整理などの力仕事）をさせられる事になる。さらに、召喚獣の感じた痛みや疲労の何割かが召喚主にフィードバックされるという素敵仕様。

それを考へると……

『おいおい、観察処分者つてことは、試験戦争で召喚獣がやられた本人も苦しいってことだろ？』

『だよな、それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるつてことになるよな』

そういう事になるよな。誰だつて自分に痛みが返つてくると知つておきながら、積極的に召喚しようとは思わないだろう。積極的になれるのは、相当なドムくらいいだろつ。

「気にするな、どうせ居ても居なくとも同じような雑魚だ」「雄一、そこは僕のフォローをするべきところだよね？」

ひでえ……どうせこり下ろすなら何でこの場面で紹介したんだ……さつき見た感じ、一応仲が良いものかと思つていたがそういう関係なんだこの2人は。

「とにかくだ、俺達の力の証明として、まずはロクラスを征服してみようと思う」

「うわ、すつごい大胆に無視された！」

哀れ吉井。

涙目になりかけている吉井から視線を外して、坂本が声を大きくしてクラス全体に呼びかける。

「皆、この境遇は大いに不満だろ？？」

『当然だ！！』

「ならば全員ペンを執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ

！」

『うおおーーっ！！』

「お、おー……」

姫路もDクラスの勢いに押されて、小さく握りこぶしを作つて上に掲げていた。

クラス全体への鼓舞を終えると、坂本が吉井に話しかけた。

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になつてもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者つて、大抵ひどい目に遭うよね？」

「大丈夫だ、奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思つて行つてみる」

「本当に？」

「もちろんだ、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

嘘は無いとハツキリ断言した坂本だが、多分嘘だろう。明久が大丈夫な理由の説明もわざとしていない様だしな。

しかし吉井は短い逡巡の後、何故かその言葉を信じたようだ……

「わかつたよ雄一、それなら使者は僕がやるよ

「ああ、頼んだぞ」

クラスメイト達の歓声と拍手に見送られてDクラスへと向かい

「騙されたアツ！！」

数分後、ズタボロになつた吉井が命からがら教室に逃げ帰つてきたのだった。

うん、やはり嘘だったな。

2話（後書き）

とこう訳で、未だ試験戦争が始まらない第2話でした。

オリ主を出すにあたって、何かしらのキャラ付けをせねば…と思つて付けた設定は『普段は目立たない奴』

……こいつ、どうやって日常に絡めりやいいんだ？

一応、後々の予定では明久と結構馬が会うことにするつもりです。

3話（前書き）

書きあがつたのがほぼ投稿時刻と一緒にです。（現在午前4時40分）

今回でやっと戦争準備編は終わりです。

「やはりそうきたか」

「やはりってなんだよ…やつぱり使者への暴行は予想通りだつたんじゃないか！」

「当然だ、そんなことも予想できないで代表が務まるか」

「吉井君、大丈夫ですか……？」

坂本に騙されて宣戦布告の使者としてロクラスへ行き、満身創痍で帰ってきた吉井は坂本に怒鳴りつけているが、坂本は表情も変えずに飄々とそれをかわしている。

他の奴らは全く気にしていないようだが、姫路だけはズタボロになつている吉井を心配しているみたいだ。

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ、心配してくれてありがとう」

ん、今度はポニー・テールの女子が吉井の方に行つて声を掛けてるな。姫路と違つて随分と薄い……いや、止めておこう。何故か考えるだけで危険な目に遭いそうな気がする。

男子が殆どを占めるこのクラス、女子は2人しか居ないようだけどどつちもいい奴そうだ。

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

「ああっ！もうダメ！死にそう！」

そんな事は無かつた。笑顔で拷問宣言つてどんな鬼だ。

それを聞いた吉井は難を逃れるべく、床を「ゴロゴロ転げまわつて痛

みをアピールしている。

そろそろ收拾が付かなくなりそうになつたと思ったところで、坂本の一聲が入つた。

「そんなことはどうでもいい。それより、今からミーティングを行なうぞ。明久、ムツツリーニ、秀吉、島田、姫路、それから剣。屋上行くからついて来い」

「ん？ 坂本、俺もか？」

「ああ、剣には今回の試合戦争で働いてもらひからな」

そう言つと、坂本は返事も聞かずに教室を出て行つてしまつた。ま、別に断る気も無いけどさ？ 面白そうだし。

坂本の後を追つて姫路と木下も教室を出たので、俺も屋上に向かつた。

全員が屋上に集まりそれぞれフェンス手前の段差に腰掛けた。全員が腰を落ち着けた頃に坂本が口を開くが……

「明久、宣戦布告は「坂本ちょっと待つてもらえるか？」 どうした、剣？」

「坂本、お前は俺の事を知つてゐるのかもしれない。が、俺はお前含めここに居る奴と誰一人として面識が無いんでな……」

二度手間で悪いんだけど、みんな名前を教えて貰えるか？ このままじゃ話し合いをしようにも俺だけ置いてけぼりになつちまつ

先程の様子から察するにこいつらはお互に顔見知りみたいだけだな、

「そりいえばそうだつたな。んじゃとりあえず俺から。俺は坂本雄一だ、知つてるとは思うがこのクラスの代表だ、試合戦争では頼りにさせてもらひや。剣、宜しく頼む。」

「ああ。ま、程ほどにやらせてもらひやせ」

坂本に軽く返すと、他の面々が次々に自己紹介していく。

「僕は吉井明久、よろしくね剣君！」

「……土屋康太、趣味は盜……いや何でもない……」

「ワシは木下秀吉じや。最初に言つておくがワシは男じやからの？」

「ウチは島田美波よ、ヨロシクね。」

「姫路瑞希です。これから1年間、よろしくおねがいしますね？」

「俺の自己紹介の時は姫路が居なかつたし改めて……俺は剣清正だ。これからよろしく頼む」

ムツツリーーー」と、土屋の発言に不穏なものを感じたがスルーしておくことにした。

そうして一通り名前の交換を済ませると、中断していた坂本の話が再開された。

「話を戻すが明久、Dクラスへの宣戦布告はできたんだな？」

「一応今日の午後に開戦予定だつて伝えてきたよ」

「それじゃ、今日は先にお昼ご飯つてことね？」

「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

「そう思つならパンでもおひいてくれると嬉しいんだけど」

「え？ 吉井君つてお昼食べない人なんですか？」

姫路が明久の発言に少し驚いているようだ。

確かに少し意外だな。第一印象からの勝手な憶測だが、吉井は食欲旺盛なタイプかと思つてたんだが。

「いや、一応食べてるよ?」

「……あれは食べていると言えるのか?」

坂本から疑問の声が上がる

「……吉井は毎、何を食べているんだ……?」

俺も気になつたので聞いてみた

「何が言いたいのさ雄」

「聞いて驚け剣、このバカの言つ主食つてのは 水と塩だ」

「 は?」

聞き間違いだらうか?俺には今、坂本が「吉井の主食は水と塩だ」と言つたように聞こえたが……

そんな訳は無いだらう。この飽食のじ時世にそんなふざけた食生活をする高校生が居る筈

「きちんと砂糖も食べているぞ!」

「あの、吉井君。水と塩と砂糖つて、食べるとは言こませんよ……

「舐める、が表現としては正解じゃね?」

聞き間違いではなかつたようだ、ガッデム。

不覚にも、あまりにも酷い食生活に涙が出来になつてしまつた……他の奴の反応はといふと、全員可哀相なものを見る目で吉井を見ていた。きっと今の俺も同じ目をしているだらう。

「飯代まで遊びに使い込む前が悪いよな
し、仕送りが少ないんだよー。」

仕送りということは、吉井は一人暮らしなのだろうか？
それなら余計に財政管理はしつかりするべきだひつに……

「吉井は一人暮らしなのか？」

「うん。僕の両親は今海外に居てね、生活費を送つてもらってるん
だけど……」

「へえ。でも、それなら余計に金の管理はしつかりしりよーゲーム
に使つたせいで生活費とか払えなかつたらツケは全部自分に来るん
だからな」

「うう……しゅ、趣味はお金がかかるんだよ……」

「……あの、良かつたら私がお弁当作つてしまよつか？」

「え？……本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるのなん
て久しぶりだよー。」

「はい、明日のお昼で良ければ」

「良かつたじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

「うんー。」

なんと、姫路が吉井に弁当を作つてくる事になつたみたいだ。
オイオイ、女子の手作り弁当とかそこの中ガルゲのイベントだよ。
ここは2次元じゃなくて現実だぞ？

しかし島田が、手放しで喜ぶ吉井を見て不機嫌そうに手を細めてい
る……さつきも殴る余地がうんぬん言つてたし、島田は吉井に何か
恨みでもあるのか？

「ふーん、瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくれるなんて」

「あ、いえーその、皆さんにも……」

「俺達にも?いいのか?」

「はい、嫌じやなかつたら」

「それは楽しみじゃのう」

「…………（「ククク）」

「…………お手並み拝見ね」

「ふむ……、そういうことなら俺も何か作つてくるか」

「「「「「え?」」「」「」「」」

む、思いついた事を言つただけなんだが……なんだこの反応?

「いや、姫路1人に、えーとひーふーみー……7人分も作つてもらうのは大変だろ?だから俺もいくらか作つてきて姫路の負担を減らそうと……あ

そうが、ここで重要なのは姫路が作った飯であることだったか。それじゃ俺の出る幕は無いか……折角だし、ちょっと腕を揮つてみようかと思つてたんだけど。

「そつか、よく考えたら姫路の弁当の方が良いよな。いい、忘れてくれ

「いや、そうじゃなくて剣。アンタ料理できるの?」

「ん?」

島田がそんな質問をしてきた。

「一応自己紹介の時にも言つたけど、料理が趣味なんだ。ま、俺も吉井と同じく一人暮らししてるので自炊は必須スキルなんだけどな」

「意外ね……」

「そうか？確かに一人暮らししている高校生は割と珍しいとは思うが……」

「一人暮らしなのに吉井より随分血色が良いじゃない」

「アイツの食事（？）を基準にするな！一人暮らしだろうが普通はあそこまで食事には困らん！」

「そ、そんなの？」

全く失礼な……。少なくとも、塩と砂糖と水を昼飯扱いする奴は今まで見たことが無かつたぞ。

吉井はそんな食生活で生きていけるのか？正直いつ倒れてもおかしくないと思つ。

「剣君も作ってくれるのー？ た、確かに姫路さんだけじゃ……全員分作るのは大変そうだよね？」

剣君の作るお弁当も食べてみたいし……僕はお願いしたい、かなあ

う……。ホ、ホラ！ 皆もそう思うよねー？」

何か必死だな吉井……欲が透けて見えるぞ？

「そうじやな、確かに姫路だけに全部作らせるのは酷じゃねえ。7人分の弁当はかなり重いじゃろ？ しの」

「……賛成……」

「ウチも剣の料理食べてみたいかも……」

「つ、剣君。お気遣いありがとうござります……でも、私も頑張つて作つてきますからね？」

「満場一致だな。そういう訳で剣、お前も頼むわ」

「おう、任せてくれ。旨いの作つてくるから」

結局、俺も弁当を作つてくる事になつた。

よつし、その時はキツチリ腕をふるつて作つてやるか！

そして一方の吉井はといふと……

「姫路さんに加えて剣君まで……2人で作つてくれれば摂取カロリーは倍に……！ああっ、神様！これは口頃、質素な食生活をしている僕への御褒美なんだね！」

などとバカげた事を言つてゐる。

「明久、剣が作る分姫路が作る量が減るんだから量はそんなに変わらないぞ」

「ああ、それに俺の作る料理は野菜たっぷりのが多いからカロリー自体は減るだろうな」

「更に言つなら明久の食生活は質素と言つより貧相じやの」

「……そつ、そんな！僕のカロリーを返してよ剣君！」

吉井の頭の中では、既に摂取予定のエネルギー量が設定されていたようだ。

「少なくともまだお前のじやねえ、そんなにカロリー減るのが嫌なら無駄遣い減らして食費作れよ……」

「無駄な出費なんて無いよ！僕の持つてるゲームに、無駄だったものなんて1つも無い！」

「明らかにそれが原因だろ？がーせめてプレイし終わつたゲームを売るなりしてだな」

「でも、もしかしたらまたやるかも知れないし……」

「そう言つても大抵戸棚の奥とかに仕舞い込んで一度とやらねえんだよ！」「

「そんな事無いよ!」

カロリーの話から始まつてどんどん脱線していく俺と吉井だが、坂本が止めに入った。

「その辺にしどけ明久、剣。いい加減、試召戦争の話に移るぞ」

おつと、やうだつた。

元々試験召喚戦争の対Dクラス戦の話し合いに来てたんだつたな。

「雄一。1つ気になつていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ?
段階を踏んでいくならEクラスからじゃろ?」

「そうだね。勝負に出るなら一気にAクラスを狙うだらうじ……どうしてなのぞ、雄一?」

木下と吉井が坂本に疑問を投げかける。

確かに俺も最初はEクラスからと思つていたんだが、何故坂本はDクラスから始めることにしたんだ?

Eクラスに誰かマズい相手が居るのか?でも、俺や姫路みたいに特殊な事情があつた奴は全員Fクラスに入つてるし、高得点者がわざわざEクラスに入る点数を取るつてのも考えにくい……

ん?事情のある生徒は全員Fクラスに集中してるんだから……

「……あ、成る程」

「お、何か気づいたか?剣」

「多分だけどな……とりあえず、Eクラスを飛ばしてDクラスに挑む理由は想像が付いた」

「ほう? 言つてみろ」

坂本が面白そうだと言つたげな表情で先を促したので、俺は今思い

ついた推測を口にした。

「つまり、Eクラスは戦うまでも無いってことだと思つ。」

「え？ でも、僕らよりクラスは上だよ？」

吉井の意見は尤もだ。

クラスは成績順で決まる為、必然的に下のクラスの生徒は上のクラスの生徒より点数が低い。
しかし……

「確かに振り分け試験の点数ではEクラスの方が上だけどな……、
それはあくまで振り分け試験時点での点数なんだ。」

Fクラスには例外……というか特殊な例として俺と姫路がいるが、
これは振り分け試験で0点扱いだつたからだ。

でもEクラスには、当然ながら実力がEクラスレベルの奴しか居ないんだ。

んで、俺と姫路は本来、それぞれ平均でBクラスとAクラスレベル
の点数が取れる。Eクラスより3つか4つ、上のクラスの点数で勝
負できるんだ。

ま、俺の場合苦手科目はFクラスレベルだけな……」

実際問題、科目毎の点数で競うことが多い試験戦争において俺みた
いに教科によつて点数差が激しい生徒は武器になる以上に扱いづら
いだろう。

得意科目で出られれば戦果は大きいだろうが、逆に苦手科目で戦わ
ざるを得ない場合一人も倒せず戦死、補習室行きになる可能性が高
いからだ。

「え？」と、つまり何が言いたいかというと……Eクラスは正直、俺
はともかく、全科目満遍なく点数が高い姫路なら1人だけでも攻略

できる程度の戦力なんだ。

それならクラスの総力戦でDクラスと戦つて、経験も積んでAクラスに戦に備えよう……っていう事だと思ったんだ。合ってるか？坂本「長々と予想を述べてはみたが、これで見当違いだつたら恥ずかし過ぎるぞ？」

今更ながら心配になつてきた……

「心配そうな顔すんな剣。まあ大体合つてゐるな、80点つて所か」

「そつか、ホツとした」

いや、ホントに。

しかし、残り20点が何なのか……気になるな。

「さて、今剣が言つたように姫路に問題の無い今、正面からやり合つてもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦つても意味が無いってことだ」

「? それならDクラスと正面からぶつかると厳しいの?」

「ああ。確實に勝てるとは言えないな」

「だつたら、最初からAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやつて今後の景気付けにしたいだろ？それに、さつき言いかけた打倒Aクラスの作戦に必要なプロセスだしな」

「あ、もしかしてその『プロセス』が残りの20点か？」

「(名答だ、剣。でも詳しい話は後でな」

「あ、あのー」

姫路が急に大声で話に入ってきた。急に大声を聞いたから耳が痛い

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さつき言いかけた、って……吉井君と坂本君は、前から試合戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはさつき、姫路の為について明久に相談されて 「それはそうと！」

坂本の発言を遮るように大声で割り込む吉井。

……成る程ね。今坂本が言いかけた言葉から察するに、吉井の目的は姫路を良い設備 それをこそAクラスの設備に移す事なんだろう。

坂本の言つ『ついさつき』つてのはおそらく、先程2人で教室から廊下に出た時だろうな。

姫路に氣があるって事が……？ 競争率激しそうだが、頑張れ吉井。

「さつきの話、Dクラスに勝てなかつたら意味がないよ」

そんなことを考えて1人納得していると、吉井が口を開いた。

「負けるわけないさ」

坂本はそれに対して、白い歯を剥き出しにして自信満々の表情でそう言い切った。

「いいか、お前ら。ウチのクラスは 最強だ」

やはり坂本は、天性のリーダータイプだな。これだけ自信満々に言い切られると、こっちもその気になつてくる。

「いいわね。面白そうじゃない！」

「もうじゅな。Aクラスの連中を引かねり落としてやるかの」

「……（グッ）」

「が、頑張りますっ」

皆もやる気十分といった感じか。

「よし、それじゃ作戦を説明するぞ」

そして作戦説明に耳を傾けること十数分、その後それはクラス全体に通達された。

そして時計が午後1時を指し、普段は午後の授業の開始を告げているチャイムの音が鳴ったのを合図に、Fクラス代表坂本雄一の作戦の元、Fクラス対Dクラスの決戦の火蓋が切って落とされた。

3話（後書き）

とこう訳で、話し合いの席での原作キャラ達との話し合いでした。
清正君は料理好きという設定なので、姫路さんの極殺弁当イベント
に絡める伏線を張つてみたり……
これがどう影響していくんでしょうね？

今話は深夜に眠気を堪えながら仕上げたので、何時にも増しておか
しい所が多いかも知れません。

明らかな間違いや、「こいつこんなこと言わねーよー」といった部
分を見つけた方。

感想で〜」一報宜しくお願ひいたします^_^(ーー)^_

あ、普通の感想も勿論お待ちしております〜！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2353w/>

バカとテストと召喚獣と教室とYシャツと俺

2011年10月9日14時55分発行